

生きつつなほも

ほんぼんと生きつつなほも理念のみ高くとらえし相克ふかし

れん

子どもらが未来を捨てて命絶つなぜになぜにとつそ寒き朝

蘇生

いのち絶つ子らの残せし訴へに傷まぬものか角なき鬼よ

深海鮫鯨

学び舎のみ生きる世界にはあらし死に急くなよ若き人たち

楓

いじめなり虐待なりしは無知なるか生育歴の足らざる思ふ

れん

いじめられ図書室に一人読みながら時間を去なす事を覚えぬ

たまこ

ことのはの いたはるころろ かぎりなく うたひあふなら いのちいきいき しん

ことのはの散りゆくことにシカトされ鹿と向きあつ六十の秋

深海鮫鯨

風に散る木の葉を見てをり朝からの私の言葉をもはや忘れて

たまこ

風吹けば空高く舞う櫂の葉表参道冬真近なり

弁慶

気づきたる表参道の花恵びる歲月街もわれも飛び越えて

れん

未舗装の土の触りの心地良き桜紅葉の段かずら道

蘇生

奥入瀬の瀬音直近き宿に来て夕日に映える蔦紅葉見る

弁慶

時雨時雨の十和田の旅のつかのまの晴れ間に小さき虹立ちしこと たまこ

ヒメマスの塩焼き食べて思っかな和井内貞行なる人のこと 弁慶

ぐんぐんと流れを逆に黒々と鮭は群れたり瀬に背立てつつ 蘇生

鮭こそは末期に撒かむ清流に精虫百億銀河のごと 深海鮫鯨

思い出は銀河にも似ていくつかの鋭く光る星のかなしさ たまこ

いきゆくは難しと思ふ星くずのちひさきにならむ銀河の底に れん

人の世をただに過ぎ来し航路なり波風起たず頭髮に銀河 深海鮫鯨

強くならう銀の薄の原をただ一匹でゆく狐のやうに たまこ

淋しさは自我の渴きか一人発つ「遙かな町へ」さまよふ父は ギオ

目の前の父母が一緒のポートレート昔のままに今もそのまま 蘇生

ねむりよりさめてきこゆは母のこえ生きなさいとぞはるかをこえて れん

ちちははの居ますが如く朝の膳しつらえ終えて手を合わす妻 弁慶

西方のキャンパスいっばいちはははは笑まふがごとく励ますごとく 真奈

真つ直ぐに図書館に続く銀杏並木かの青春をくれし父母 たまこ

銀杏散る真つ直ぐな道歩みつつ君と語らいし彼の日懐かし 弁慶

銀杏葉の散りしくつづく空のしたビュフェ作品をあまたみし後

れん

ビュツフェの描く黒き林の風の音サンタマアリア闇に消えゆく

たまこ

ビュツフェの絵の暗き男の三角の顔に良く似た哲学の師よ

弁慶

この枠の せまき窓かな 横ほそめ たてよこ四角 筆がはしれば 眞

小さな障子の枠の紙あけてインスタレーション風の跡とぞ

れん

張り替えし白き障子の光りなか二羽の小鳥の影が去りゆく

蘇生

色づきし木の葉で障子の破れめをふさぎし祖母の今日は命日

たまこ

哀しみを木の葉ひとつで化けてみる技もなかりし雨ふる真夜は

れん

隙間なく壁を覆いしかの蔦がまばらな紅を壁に散らしぬ

蘇生

蔦紅葉古き社の庭の隅苔むす杉の上の枝まで

弁慶

紅葉の向かいの山に木霊する媪が田圃に藁を打つ音

たまこ

多摩川に紅葉流るる朝まだき砧の音の遠く微かに

弁慶

庭先にハイビスカスの大輪が帰化した様に咲く師走かな

蘇生

過ぎし世に梅も帰化せり祖先らも渡り来たれりこのつまし国

深海鮫鱈

国境がある帰化もあるなり人はみな等しきものぞ人間なりし

れん

国境の長きトンネル抜け出でて白く積もりし綿雪を見る

弁慶

無人駅に電車を待てば雪虫が風の流れに遅れつつ飛ぶ

たまこ

雪虫がいつしか湧きて雪がきた北の師走は厳しかりけり

蘇生

故里の峠に立ちて眺むれば南アルプスはや雪化粧

弁慶

人生の峠を過ぎてふり向けば雪に凍えるあの紅き唇

深海鮫鯨

つもりなく長けりた年を祝う日に嫁入り道具 鮮冷蔵庫

しん

花嫁の手を取る老婆の歩に合わせ雪降る中を進む行列

弁慶

電飾の街に降る雪悲しみの器と人間を言ひし人はも

たまこ

あけぼのの若葉に夏は万緑とめぐりて今朝の冬ざれの雨

蘇生

あけぼのの春は去り行き夏秋も過ぎ去り行きて今朝は木枯

弁慶

ソルヴェイグの歌くちずさみ女なら待ってるはずと決めていないか

千種

久女とか円地は男に恐れらるこの不器用こそが珠玉なるのに

真奈

女流らに流れるたまはおほしくてあはれ詩ふも華やぐはなぜ

眞

思ひては数え日の明日埃及へ旅立つわれは今宵華やぐ

蘇生

はしやぎすぎでいたかもしれず木枯らしが乾きすぎたるくちびるに凍む

たまこ

気負わずに日々の勤めを果たし終えて一人くんだりし紀尾井坂かな

弁慶

時雨きて傘持ちかへる女坂また愛国心の踏み絵ふむ世に

真奈

戦争へ傾いてゆく危うさに両手をたれてみているばかり

たまこ

踏みにぢむ かくごを決めて 愛すつる うたにのみ有る このよ生くすべ

眞

非を認め謝ることはつらいこと「謝るくらいなら言つな」という君

茉莉花

ちいさなる非すら認めづご免さい言えなき人と距離はわびしく

れん

西行の越えし足柄踏みしめて思えば時は八百年経し

弁慶

薄紅のゆかりの女の^{ひと}涕の旅にしありて永遠に澄みゆく

真奈

一世なる歳晚まえの旅なりし澄むもすまぬも今を生きぬる

れん

歳晩に詩筆は墨に染まれども硯池に落つるわが髪は白

深海鮫鱈

雪に釣る蓑の翁の一幅の墨絵にそえし詩文江雪

弁慶

朗読は岸田今日子の例ふれば背な撫でくれるゆるやかな声

千種

悼むべし 二つの心 表裏にて 演ぜし今日子 かけがいのなく

眞

けふありし いのちたふとし まよひつつ よりそひてなほ 救はれてゐし

れん

迷いつつ右往左往の人生も他人には言えぬ楽しみもあり

弁慶

路地裏の猫のあいさつにやあにやあと何かいいこと伝えるらしく

千種

モノクロのマフラー掛けて摺り足で猫科の目してをのこ等の行く

真奈

猫抱いてマフラーをしたチヨビ髭の老人登る夏目坂かな

弁慶

白亜紀のいのちのあとを辿りみるアンモナイトを胸にぞ押さふる

れん

一瞬のうちに永遠きり結ぶかの歌びとの白描の翳

丹仙

念願のナイルの月を仰ぎみてファラオのミイラ時空遙かに

蘇生

シュルル紀の海の蠍を初めてに見たる震へぞ涙あふれき

れん

ロッキーの山頂にある魚類化石カンブリヤ紀に栄えし生物

弁慶

化石てふ渾名の友の人の世の矛盾みつめし眸は澄みてゐし

真奈

明石なる楽生病院兵庫なりき恐竜化石みつかる元朝

れん

あめつち
天地のナイルの流れ去年今年ファラオの謎にわれは悩みり

蘇生

エジプトの死後はジョイフル聖書にも似たる話あり卵贈り合ふ

れん

グレゴリオ聖歌の調べ悲しくも人みな「死への道半ば」とかや

ギオ

戦時下にグレゴリオ聖歌絶やさじとフランス人神父ミッシェンの日々

真奈

十四にて写譜せし秘曲ミセレーレ異国にあれど家舎を離れず

丹仙

モノクロのルオーの版画ふと浮ぶミゼレーなる曲は知らずに

れん

ふと浮かぶ十八にしてなぜか世を去ったファラオのツタンカーメン

蘇生

アメンホテップ其の名を聞けば幼き日読みし「少年王者」なる本

弁慶

九条を世界遺産にといふ書あり戦争放棄が奇跡とは、さて

ギオ

九条は珍品にして宝物普通の物に変えないでね

真奈

硫黄島散るぞ悲しきその手紙共に読むなり平成の子と

丹仙

戦争の疎開先にてこのわれを背負ひて逃げし叔父も子供にて

れん

唐黍のひと粒ひと粒噛みしめた疎開の日々のただ青い空

真奈

東の間に六十年は経ちにけり青き初空いかのぼし 舞ふ

丹仙

空の青いところにとめて遊びたり柏谷の百穴ながれし歲月

れん

函南の柏谷の百穴懐かしく幼き頃を思い出さずる日

弁慶

人生の秋を生くるや独り夜は思はゆ彼の何すらむかと

ギオ

桃李和歌連作百首歌集

第七六〇一首より七七〇〇首迄

平成十八年十一月十三日より平成十九年一月十四日迄